

養成段階における保育実践力の向上を目指した取り組み —JFA 公認キッズリーダー資格を取得した 学生に対する実践実習の実施—

An Effort to Improve the Practical Nursing Ability in the Training Phase — Implementation of Hands-on Training for Students Certified with JFA Official Kids' Leader —

時本 英知 工藤 朗詠
Eichi TOKIMOTO Akie KUDOU

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words : 保育実践力、実践実習、キッズリーダー資格

I. 背景と目的

① 保育者養成と保育実践力の育成

保育士や幼稚園教諭といった保育者を養成する大学、短期大学、専門学校（以降、保育者養成校）を卒業した学生が保育現場に就職した場合、すぐに保育の実践現場に出ることになり、保育者養成校で学んだ内容を即実践で活かすことが求められる。時には3月に卒業したばかりの新任保育者が着任早々にクラス担任を任されるケースも見受けられる。そのため新卒の保育者にもクラスの運営力や保育の展開力、乳幼児の理解力など多様な力を最低限身につけた状態で保育者養成校を卒業することが望まれている。

保育者養成校のカリキュラムは講義・演習・実習の科目で構成され、講義や演習科目を通して基本的な知識と技術を身につけたうえで保育現場での実習に臨む。実習では現場の実際を確認しながら保育を実践し保育実践力を養うことになる。ただし、実習生の力量を考えると実習で与えられる実践の機会は決して多くはない。また、保育現場は日常的な保育や教育の流れが年間を通して組み立てられているため、必ずしも実習生が実践したいと考えている内容が実施できるわけでもない。例え希望通りの実践内容を実施できたとしても、実施後に自らの実践をふりかえりながら反省点や課題を見出し、改めて計画して実践を行うほどの機会を与えられることは決して多くはない。そのため、養成校では「保育実践演習」や「教職実践演習」などの最終段階の授業において、保育園児や幼稚園児を想

定し計画を立て模擬保育・模擬授業を展開しながら、さらなる実践力の向上に努めている。しかし、保育において自らが起こした行動に対する子どもたちの生の反応ほど、気づかされたり考えさせられたりするものはない。そう考えると模擬保育・模擬授業での学びにも限界があると言わざるを得ない。結果として、就職後に保育現場で上司や先輩保育者から指導を仰ぎながら働くなかで保育実践力を身につけていく部分が多くなっているのが現状である。

ただ、その状況に甘んじているだけでは質の高い保育者を育成することはできない。そもそも、新任保育者がいきなりクラス担任を任される現状を考えると、保育現場で働きながら上司や先輩保育者から指導を仰ぎながら実践力を身につけることを必ずしも期待すべきではない。また、秋山（2011）が実践力を磨くという点において「養成校から受け入れた実習生や新卒者への指導の難しさを嘆ずる声も少なくなかった」と述べているように、保育現場で当たり前に行けるとする考えも改めなければならない¹。さらに秋山（2011）は実施した現場で求められる幼児教育職務実践力の指標の作成を目指して実施した保育現場の調査結果から「具体的な実践力を磨くことが養成校在學生に必要であるということが、現場保育者からも強調されている」としているように²、その役割は保育者養成校の使命の一つと言わざるを得ない。

それでは養成段階でどこまでその保育実践力を高めることができるのであろうか。松山（2008）は保育実践力について養成段階で完全に身につけることは容易でないとしたうえで「卒業後、保育者として子どもの保育にあたる時、保育実践力を自ら育てていくことは必要不可欠となる」と述べている³。このように、養成段階で保育実践力を高めつつも、完全な状態にすることが難しいのであれば、自ら保育実践力を高められるように育成することが保育者養成校の役割と言える。

② 青森県の現状と本学の取り組み

筆者らが所属する青森中央短期大学幼児保育学科では、地域の課題等に対応出来る実践力を身につけた保育者を送り出すことを目指して取り組んでいる。その一つが子どもの運動の機会を拡大できる保育者の育成である。

文部科学省の学校保健統計調査によると青森県における5歳から7歳の年齢の子どもの肥満傾向出現率が全年齢で全国平均よりも高い状態が続いている。平成27年度速報値の幼稚園に通う5歳児の状況を見ると全国の肥満傾向児の出現率が2.29%であるのに対して、青森県は5.0%と高くなっている⁴。この肥満傾向児の出現率が高い状態は保育所に通う3歳から5歳の子どもも同様に高いことが平成26年度の県内調査で明らかとなったと報告された⁵。青森県は肥満傾向児が多い理由としてスクールパスの導入率が高いことや親世代の食生活の影響、雪による冬の運動量の不足などの複合的な要因が関

¹ 秋山真奈美（2011）「現場で求められる幼児教育実践力とは？－幼児教育職務尺度の作成を通じて－」佐野短期大学研究紀要第22号，129-141，139頁参照。

² 秋山真奈美（2011）「現場で求められる幼児教育実践力とは？－幼児教育職務尺度の作成を通じて－」佐野短期大学研究紀要第22号，129-141，2011，139頁参照。

³ 松山由美子（2008）「保育者養成における『保育実践力』の育成のためのカリキュラム構成と評価」四天王寺大学紀要第46号，233-253，234頁参照。

⁴ 文部科学省（2016）「学校保健統計調査 平成27年度（速報）都道府県別肥満傾向の出現率」（<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do>）2016.2.6.

⁵ 朝日新聞（2015）「保育所の幼児肥満傾向」2015.8.27朝刊に掲載

係している可能性を示唆している。このように青森県では子どもの運動の機会の拡大が課題の一つとして挙げられている。

幼児期の運動習慣はその後の少年期の運動継続にも大きな影響を与えると考えられる。また、子どもに運動を楽しんだ経験があれば、大人になってからその魅力を子どもたちへ伝える可能性が高まると考えられる。そのためにも、まずは保育園や幼稚園で楽しみながら運動経験を積み重ねることが必要であり、それを計画し実践できる保育者の存在が大切となる。

そこで本学では保育者の運動を展開する技術と実践力の向上を目指して幾つかの取り組みを行っている。資格に関しては一つ目にレクリエーション・インストラクター資格取得のためのカリキュラムの設定、二つ目に幼児体育指導者認定資格取得のための講習会の実施、三つ目にJFA公認キッズリーダー資格取得のための講習会の実施がある。また、幼児保育学科の学生が中心となって活動しているサークルには地域で活動する知的・発達障がい児を対象としたサッカークラブの活動をサポートするサークルや、障がい児の運動遊び教室を開催するサークルがある。さらに青森では雪の多い冬に運動量が減る傾向にあるため、保育者をめざす学生自らが冬のスポーツに親しみ、将来その魅力を子どもに伝えられるように授業でスノーボードを実施している。

本研究では子どもの運動の機会を拡大させる保育実践力を持った保育者の育成を目指した取り組みの一つであるJFA公認キッズリーダー資格について取り上げる。まずはその資格と本学が実施している資格取得のための講習会について整理する。また、実施してきた取り組み結果を通して、資格取得と保育実践力の関係についての現状と課題を整理する。そのうえでJFA公認キッズリーダー資格取得後に保育実践力を高めていく方法について考察することを本研究の目的とする。

II. JFA 公認キッズリーダー資格と保育実践

JFA公認キッズリーダー資格は日本サッカー協会が公認している指導者ライセンスの一つであり、「10歳以下の選手・子供たちに関わる指導者・保護者等で体を動かすことの楽しさを伝える指導者の育成」を目指して講習会を実施している。資格は6歳以下を対象としたU-6資格、8歳以下を対象としたU-8資格、10歳以下を対象としたU-10資格に分けられており、本学では前期中にU-6資格と後期中にU-8資格の講習会をそれぞれ年に1回実施している。講習会は公益財団法人日本サッカー協会のキッズリーダーインストラクター等が担当しており、本学では講義2.5時間、実技1.5時間、指導実践3時間で実施している。

本学におけるそれぞれの資格取得人数は表1の通りである。なおU-8資格については平成27年度より講習会を開始したため平成26年度以前の資格取得者はいない。

この資格は短期間で取得できるというメリットはあるが、その反面、資格取得と同時に学んだ内容を保育現場等で活用する技術や実践力やそれらを自ら高める力が身に

表1 本学のキッズリーダー養成講習会受講人数

年度	学年	人数					
		U-6	合計	U-8	合計		
平成23年度	2年	44	46				
	1年	2					
平成24年度	2年	33	40				
	1年	7					
平成25年度	2年	38	57				
	1年	19					
平成26年度	2年	6	57				
	1年	51					
平成27年度	2年	0	41			7	18
	1年	41				11	

つけられているとは言い難い。そのため、卒業後に保育現場等で十分に活かすことができていないという現状も見られている。

本稿の筆者の一人である工藤は保育者養成校在学中に JFA 公認キッズリーダー資格を取得し、卒業後に幼稚園教諭として保育現場を経験している。その際、資格取得と保育実践について次のように感じていた。

学生のころ保育現場へ出た時にきっと役立つだろうと JFA 公認キッズリーダーの資格を取得した。講習の中ではサッカーを通じてスポーツや体を動かすことの楽しさ、そしてそれらを子どもたちに指導する方法について講義と演習、実技を通して学んだ。資格取得後は学んだことを実践する場は特にないまま、半年以上が経ち卒業を迎えた。卒業後の4月から幼稚園のクラス担任となると当然日々の保育内容を考える機会が増えることになる。そこで資格を取得した際に受けた講習会の内容を思い起こしながら、保育で実践できないかと考えた。しかし、いざ保育実践に向けて計画を立てていくと講習会を通して何を学び、どのような活動をしたというのは覚えていても、活動内容を子どもたちにどのようにわかりやすく伝え、子どもたちの反応をもとにどのように活動を展開すべきかなどの不安が膨らんできたのである。半年前の講習会では仲間の学生を子どもに見立てて模擬的に実践を行ってはいるものの、それはあくまで学生の反応であるため子どものそれとは異なる。そこで初めて実践の仕方が曖昧な状態であり、いざ子どもたちに実践すると「できる」とは言えない自分に気づかされたのである。

このように学生は保育現場へ出た時に役立つことを期待し資格を取得していくが、いつしか取得したことに満足し、その力がしっかりと根付いていないことには気付いていないことが多い。特に JFA 公認キッズリーダー資格のような保育士資格や幼稚園教諭免許の補完的な役割を担う資格は、取得してもそれをいざという時に実践できなければその有用性は薄れてしまうことになる。本学としても学生が資格を取得することを目的にするのではなく、その資格を学生にどのように活かしていくかを考えさせ卒業までに可能なかぎり保育実践力に結びつけていくことが課題となっている。

Ⅲ. 保育実践力の育成を目指した取り組み

キッズリーダーを取得した学生の保育実践力の向上を目指して、青森県サッカー協会キッズ委員会が関連する活動にボランティア等での参加を促し、その実践力の向上に努めようと試みた。しかし、特に本学が所在する青森市はイベント型の活動が中心となっており、継続して行われる日常的な活動を経験する場が少ない状況であった。一方で、時本（2014）によると地域で活動する知的・発達障がい児を対象としたスポーツクラブの活動をボランティアとしてサポートしながら、継続的に実践経験を積み重ねた学生が一定の実践力の向上や、学びの内容を就職後に保育現場や支援現場で活用しているという結果が示されている⁶。このような結果からも本学の卒業生が保育現場で資格を活かすためには、資格取得後の実践の機会の提供とフォローアップを進めていくことでより効果的にその実践力

⁶ 時本英知（2014）「養成段階におけるボランティア経験が保育者・支援者の実践に与える影響について～知的・発達障がい児に対するスポーツ活動のサポートを通じた学びのプロセス」地域福祉サイエンス創刊号, 153-163.

の向上に繋がれると考えた。

そこで本学が中心となり、一般社団法人青森県サッカー協会キッズ委員会、NPO 法人レアリスルスポーツクラブ、認定こども園青森中央短期大学附属第一幼稚園との連携と協力のもと、資格取得学生が継続的な実践経験とフォローアップを受けられる取り組みを検討することとなった。その結果、保育現場での活動を想定した「就学前児童を対象とした活動における指導実践実習」の実施と、障がい児保育の実施を想定した「障がい児を対象とした活動における指導実践実習」の実施を進めることとした。ちなみに平成27年度は平成28年度の本格的な実施に向けて試験的に実施した内容である。

① 就学前児童を対象とした活動における実践実習

実践現場：認定こども園青森中央短期大学附属第一幼稚園

活動場所：青森中央短期大学体育館

指導者：青森県サッカー協会キッズ委員会 指導者

実習概要：

	日にち	時間	対象児童	参加学生数		
				合計	1年	2年
1	10/22 (木)	10:30~12:10	年長児童 (約20名)	7	0	7
2	10/22 (木)	12:00~13:40	年長児童 (約20名)	5	0	5
3	11/19 (木)	10:30~12:10	年中児童 (約20名)	6	6	0
4	11/19 (木)	12:00~13:40	年中児童 (約20名)	5	2	3
5	12/17 (木)	10:30~12:10	年長児童 (約20名)	5	5	0
6	12/17 (木)	12:00~13:40	年長児童 (約20名)	4	2	2

② 障がい児を対象とした活動における実践実習

実践現場：NPO 法人レアリスルスポーツクラブ 障がい児・者サッカースクール

活動場所：青森中央短期大学体育館

指導者：レアリスルスポーツクラブ 指導者 (サッカー協会登録指導者)

実習概要：

	日にち	時間	対象児童	参加学生数		
				合計	1年	2年
1	11/1 (日)	10:30~12:00	知的・発達障がい児・者 (約15名)	5	4	1
2	12/20 (日)	10:30~12:00	知的・発達障がい児・者 (約15名)	7	3	4
3	1/10 (日)	10:30~12:00	知的・発達障がい児・者 (約15名)	5	3	2

◆実践実習の流れ

	実施内容	具体的な内容
1	事前指導・打合せ	講習会内容の確認と指導実践計画の打合せ
2	活動のサポート	指導者が実施する活動に対する子どものフォローと確認
3	活動内容の見本	指導者が実施する活動のやり方を具体的に子どもに見せる
4	指導の実践	計画した活動（鬼ごっこ系）の説明と実践
5	指導内容の確認	指導者が実施する活動に対する子どものフォローと確認
6	実践の振り返り	自らの実践を振り返り、それに対するアドバイス

IV. 結果と考察

平成27年度の実践実習は平成28年度の本格的な実施に向けて、そのあり方を検討する目的で試験的に実施したものである。その上でここでは平成27年度の実践実習の実施結果から課題を整理し、それをもとに平成28年度の実践実習の実施回数や実施方法、実践実習のあり方について考察する。

実践実習を実施するにあたり、学生に対しては任意で参加を呼びかけた。両学年合わせて100名程度の資格取得学生がいるにもかかわらず、当初は積極的に参加申し込みをする学生は少ない状況であった。そのため、資格取得学生に対して個別にその必要性をさらに説明し参加を呼びかけたことで、参加申し込みをする学生が増えていった。特に2年生については資格取得から約1年が経過している学生が多く、参加申し込みに影響したと考えられる。その理由としては、講習会内で抱いた疑問や不安が時間とともに薄らいでいき、結果として資格を取得したことで満足してしまっていたと推測される。そのため、実際に子どもに実施する実践実習の必要性を1年生以上に見出しにくい状態になっていた可能性がある。

実践実習を通して学生は考えている以上に活動内容をわかりやすく伝えたり、やって見せたりすることの難しさや、目の前にいる子どもの状況に合わせて計画を実施することの難しさを改めて感じている様子が伺えた。また、資格の目的として身体を動かす楽しさを伝えるということを学んでいたにもかかわらず、実践実習ではサッカーをさせようとする動きが見られた。しかし、実践実習を通して次第にその行動は減っていった。つまり、子どもの反応や様子を通して気づくことができたり、学んだ内容を思い出したりすることが実践実習を通してできている可能性がある。上村（2012）は「学内における学びの段階では、子どもの実態が目の前に存在しないため、子どもの姿に関する想像を膨らませたり、対象年齢に応じた遊びをデザインしたりすることの難しさが想定される」とし、その状況が「子ども不在の保育実践」へとつながる可能性がある⁷と指摘している。この点を考えると実践実習での学びは、将来保育者として働いた時に「子ども不在の実践」を防ぐことにつながる可能性があると考えられよう。

平成27年度の取り組みは試験的な取り組みということもあり、多くの学生が1回もしくは2回の参加であった。そのため実践経験を通しての気づきを明確にし、自らの実践に活かせるようにするには

⁷ 上村晶（2012）「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」高田短期大学紀要第30号，85-94，86頁参照。

決して十分な経験を積めたとは言えない。子どものダイレクトな反応を受け、それらが何を意味しているのかを考え、それをもとに試行錯誤しながら計画、実践できるようになっていくには、月1回の実践実習の機会として1年間12回に渡って参加し経験を積むことが理想的である。ただ様々な事情を考えると半期5回程度の実践実習の参加が現実的と考えられる。実践実習の適切な回数や期間については実施後の結果をもとにさらに検討する必要がある。

V. まとめ

養成段階で保育実践力や自ら保育実践力を高められる力を向上させるには、実際に子どもと向き合って学ぶ保育園や幼稚園の現場実習でも可能である。しかし、そもそも現場実習は評価される場でもあるため、学生はどうしても「失敗したくない」という意識が強くなってしまふ。その結果、子どもの状況を捉えて実践するということに達しにくいと考えられる。上村（2012）によると保育者を目指す学生は「外部から遊びを収集したいという思考が学生の中に根強く存在しており、子ども理解を中心とした保育実践の重要性の認識と相反するという見方もできる」と指摘している⁸ように、保育者を養成するうえでの一つの課題といえる。今回の実践実習は学生が子どもに向き合い、実践を考えチャレンジする機会に十分なりうると考えられる。この点についても意識し、平成28年度の実践実習を本格実施し、その結果をもとにさらに効果的な実践実習のあり方や学びの場のあり方についてさらに検討していきたい。

参考文献

1. 尾崎新編（2005）『『ゆらぐ』ことのできる力 ゆらぎと社会福祉実践』誠信書房。
2. 津守真（1997）『保育の地平 私的体験から普遍に向けて』ミネルヴァ書房。
3. 秋山真奈美（2011）「現場で求められる幼児教育実践力とは？－幼児教育職務尺度の作成を通じて－」佐野短期大学研究紀要第22号，129-141.
4. 秋山真奈美（2013）「現場で求められる幼児教育実践力とは？(2)－『幼児教育職務実践力尺度』を作成するための調査結果における保育所保育士と幼稚園教諭の比較－」佐野短期大学研究紀要第24号，45-57.
5. 上村晶（2012）「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」高田短期大学紀要第30号，85-94.
6. 上村晶（2013）「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察(2)」高田短期大学紀要第31号，79-88.
7. 松山由美子（2008）「保育者養成における『保育実践力』の育成のためのカリキュラム構成と評価」四天王寺大学紀要第46号，233-253.
8. 松山由美子（2009）「保育者養成における『保育実践力』の育成のためのカリキュラム構成と評

⁸ 上村晶（2012）「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察」高田短期大学紀要第30号，85-94，93頁参照。

- 価(2)－『理論と実践の融合』についての一考察－」四天王寺大学紀要第48, 121-136.
9. 松山由美子 (2010) 「保育者養成における『保育実践力』の育成のための学びの場－模擬保育と学外実習に関する質問紙調査の結果からの考察－」四天王寺大学紀要第49, 197-212.
 10. 小島千恵子 (2013) 「実践力を身につけるための実習プログラムの構築－学生の実習後の『保育者の資質と力量』についての振り返りの記述から－」名古屋柳城短期大学研究紀要第35号, 173-181.